

メキシコシティのオトミー

先住民の貧困研究フィールド・ノート

受田 宏之

はじめに

メキシコの先住民問題

ラテンアメリカにおいて、先住民 (pueblos indígenas) をめぐる問題、すなわち、彼らが経済的にだけでなく社会的・文化的にも不利な立場に置かれているという問題は、今日では大きく取り上げられるようになった。とりわけ先住民人口比の高いメキシコやグアテマラ等の旧メソ・アメリカ諸国、ペルーやボリビア等の旧インカ諸国において、それはあてはまる。その理由として、1980年代後半以降の貧困削減戦略の高まりの中で先住民の貧困が改めて注目されたこと、先住民自身による経済的ないし文化的権利の確立を求める運動の勃興、ILO等の国連機関による「先住民の権利」法制化の動き、最後に本稿で扱うメキシコでは、未だ解決の糸口のみえないサパティスタ国民解放軍 (EZLN) による武装蜂起があったこと、を挙げることができよう。しかしながら、先住民に関する議論は、イデオロギー上の相違やバランスの取れた実証データの欠如のため、混乱している。

メキシコの『1990年人口センサス』*1によれば、5歳以上の人口の中で何らかの先住民言語を話す者は約528万人、同人口の7.49%を占める。その80.2%が、二言語人口、すなわち、母語以外にスペイン語も話す人々である。だが、最も曖昧さの残らない定義とはいえ、先住民言語を話すか否かの質問に依拠する定義は、先住民に対する差別や、母語を喪失したものの先住民のアイデンティティや文化的特徴を保持する人々の存在を念頭におくとき、先住民人口を過小評価する傾向にある。特に、この問題は都市に住む先住民人口を測る際に顕著である。したがって、『人口センサス』のデータは、先住民人口の最小推定値とみなすべきだろう。

非先住民と比べ、先住民の窮乏は著しいものがある。同『センサス』によれば、成人非識字人口は非先住民では10%に満たないのに対し、先住民では40.7%にも達する。同様に、非先住民の小学校未修了者は35.2%なのに対し、先住民のそれは73.9%と倍以上の値を示す。こうした先住民の人的資本の蓄積水準の低さは、貧困とも結びついている。最低賃金以下の所得しか得ていない就業者

は非先住民では23.8%（最低賃金の2倍以下は61.6%）である一方、先住民の間では実に59.7%（同82.6%）にも及ぶ*2。居住環境や健康といった人間の「基本的必要」を構成するその他の要素に関しても、先住民がきわめて不利な状況下にあることに変わりはない*3。

現在のメキシコでは、先住民問題を論じる枠組として、文化的本質主義（*esencialismo cultural*）とマルクス主義の影響力が強い。前者は、メキシコに56、地域差も含めるとそれ以上とされる先住民社会の固有性とその（部分的）永続性を主張する一方、後者は、慢性的な貧困に代表される先住民問題は彼らが外国人も含む非先住民により搾取されていることの結果であると論じる。興味深いのは、議論の出発点は異なりながらも両者が、「自治」のスローガンの下、しばしば先住民の文化回復と経済発展の双方を望ましい目標として掲げていることである*4。他方、政府の政策レベルにおいては、正統派の新古典派経済学が支配的である*5。だが、新古典派経済学を含むこれら三つの枠組は、500年に及ぶ歴史を有しさまざまな要因の複雑な相互作用により根深いものとなっている先住民問題を十全に論じ得ない。「先住民の自治」という響きのよい政治的言説を掲げたり、あるいは、データの信憑性が必ずしも定かでない統計分析に基づき、「人的資本を高めるための総合的なプログラムを実施せよ」という近年の対貧困政策の決り文句を繰り返すだけでは、有効な代替案を提起したことにはならない、と筆者は考える。

筆者の関心は、先住民をめぐる問題の中で最も深刻といえる経済的問題——先住民の大半が人間開発からの剝奪状況にあるという事実とその原因——を理解することにある。そのためには、経済学の通常的手法に頼るだけでは不十分であり、初期条件を特定化する歴史学、さらには個々の先住

民の置かれた具体的な文脈を解き明かす人類学的手法も取り入れた、折衷的な接近法が求められるであろう。1998年の7月よりメキシコの首都メキシコシティにおいて、筆者は、ケタロ州サンティアゴ・メスキティトラン（Santiago Mexquitlan、以下SMと記述）出身のオトミー（otomi）移住者の実態調査に励んでいる。農地の細分化と雇用機会の不足に悩む農村共同体から移住してきたものの、都市においても開発から取り残されている彼らが置かれた文脈を、政治的、文化的側面も含む広い角度から解明することは、先住民問題の本質を理解する手助けとなろう。

この実態調査がまだ進行途中であることおよび紙数の制約から、本稿では、SM出身オトミー移住者の経済状況について厳密な分析をすることはできない。第1節では、メキシコシティの先住民移住者について概観した後、出身農村のSM、移住先のメキシコシティ双方におけるオトミーの生活の質を論じる。続く第2節では、オトミー移住者の主要な経済活動のひとつである民芸品生産に焦点を当てる。この、「政府の影響を受けた、先住民移住者のインフォーマル部門」とみなし得る活動は、オトミー移住者の直面する過酷な制約条件とそのなかで喘ぐ彼らの苦闘を物語るであろう。

* 1 INEGI, *XI Censo General de Población y Vivienda 1990*, México.

* 2 『人口センサス』では所得は貨幣所得に限られ自家消費は含まないこと、先住民の方が第一次産業就業者の比率の高いこと（非先住民の20.3%に対し61.4%）の2点を考慮するならば、このデータは先住民就業者の所得を過小に評価している可能性がある。

* 3 Consejo Nacional de Población, *Desigualdad regional y marginación municipal en México 1990*, México, 1994, pp.115-117; Fideicomiso para la Salud de los Niños Indígenas de México, *Nutrición y salud: la*

salud de los niños indígenas de México, México, 1993.

* 4 本質主義論者の代表的著書として, Miguel Bartolomé y Alicia Barabas, *La pluralidad en peligro: Procesos de transfiguración y extinción cultural en Oaxaca, México*, INI, 1996; Guillermo Bonfil-Batalla, *México profundo: una civilización negada*, México, Grijalbo, 1994. マルクス主義者による先住民問題の解釈は一枚岩ではないが, ここでは, 「先住民共同体は国内における植民地のような存在である」とするいわゆる国内植民地主義論を展開した書物として, Pablo González-Casanova, *La democracia en México*, México, Ediciones Era, 1965; Rodolfo Stavenhagen, *Las clases sociales en sociedades agrarias*, México, Siglo XXI editores, 1969 の2冊を, 先住民による「自治」の論点を取り入れた最近の議論として, Consuelo Sánchez, *Los pueblos indígenas: del indigenismo a la autonomía*, México, Siglo XXI editores, 1999 を指摘するとどめる。

* 5 新古典派経済学者の先住民問題についての知識は乏しい。彼らが先住民問題を扱うとき, 通常, 彼らの所得貧困を人的資本の不足により説明する作業にとどまっている。世銀エコノミストらによる, メキシコ, グアテマラ, ペルー, ボリビア4カ国の先住民の貧困の分析は, おそらく新古典派経済学者による最も大がかりな研究である (George Psacharopoulos and Harry A. Patrinos ed., *Indigenous People and Poverty in Latin America: An Empirical Analysis*, Washington D. C., World Bank, 1994)。その統計分析によれば, (1)先住民は非先住民よりも所得が低くかつ貧困下にある確率が高い, (2)その最大の要因は彼らの人的資本の未蓄積にある, (3)けれども人的資本の格差では説明し切れない大きな残差が残る, という。たとえばメキシコでは, 1人当たり月額60米ドル (購買力平価で修正) を貧困線と定義するならば, 非先住民の17.9%に対し先住民の貧困層比率は80.6%にも達する。メキシコ先住民のこうした低所得は, 低学歴に代表される個人々の生産性 (を示すと

される指標の) の低さだけでは説明できない。先住民と非先住民間の所得格差の48%は, 生産性格差には帰属できない残差として残るといふ。このような統計的手法を用いた研究の価値は否定できない。しかしそれは, なぜ先住民の人的資本の蓄積が低水準にあるのか, 同水準の人的資本を有する先住民と非先住民が同じ所得を得るのを妨げる要因は何か, を具体的に説明できない。また, 先住民を一つのグループとして扱う研究も必要な一方で, 先住民内部にみられる分化を考慮に入れる必要性も高まっている。

1 ケレタロ州サンティアゴ・メスキティラン出身オトミー移住者

1. メキシコシティの先住民移住者

『1995年度人口調査』によれば, 同年におけるメキシコの先住民人口は約548万人, 5歳以上人口の6.84%を占める。そのうち, 筆者のインフォーマントが居住する連邦区 (Distrito Federal) における先住民人口は10万890人, メキシコ州の中で連邦区と近接する27市における先住民人口は11万1715名である。メキシコシティの抱える巨大な人口規模を考慮するなら, その比重は小さいといえる*6。だが, ミルパ・アルタなどの連邦区南部地域に元々そこで生活してきたナウア (nahuatl) の存在*7を差し引いても, 先述の定義上の問題を念頭に置かなければ, メキシコシティに実際に居住する先住民移住者人口はこの数値を上回るであろう。

近年のメキシコシティに住んだことのある人は, 先住民といえば, 民族衣装を纏い路上で民芸品やスナックを売っている女性や, 哀れみを誘う顔をして物乞いする子供たちの姿を連想するかもしれない。その背景に彼らの貧困を読み取るであろう。筆者の知るオトミー移住者の多くの実態も, こうしたイメージと重なる。しかしながら, メキシコシティに移住した先住民のすべてが一様に人間開

発から取り残されているわけではない。先住民移住者内においても、どの時期に移住してきたかにより差異がみられる。それは、移住後都市で生活した期間が長いほど、都市で要求される人的資本や生活様式を身につけるため生活水準が上昇していく、という移住現象全般に多かれ少なかれあてはまる論点のみを指しているのではない。むしろ、先住民移住者内の多様性は、彼らにとって次第に不利に働くことになる、農村・都市双方における経済の構造転換により説明できる。

メキシコ経済が安定成長を享受した1950、60年代までに都市に移住した大半の先住民移住者の場合とは異なり、それ以降の先住民の移住においては、出身農村での農地細分化の進展(minifundismo)・農業技術の遅れ・農外雇用機会の欠如、その結果としての慢性的な貧困という、プッシュ要因が支配的となった。彼ら移住者の人的資本の蓄積は低い一方、満足のいく所得を得るために要求される人的資本の水準は、とりわけ債務危機に端を発する経済改革の実施以降、日増しに高まっていく。それゆえ、新規の移住者になればなるほど、就ける経済活動は建設労働やインフォーマル部門に限られ、所得の停滞や不安定性、劣悪な居住環境の中で生き抜くことを余儀なくされるようになる*。

筆者とSM出身オトミー移住者との付き合いは、創設間もない連邦区政府の先住民移住者支援機関(Centro de Atención al Indígena Migrante: CATIM)の職員と一緒に、連邦区のクアウテモック行政区に位置する、17家族の居住する不法占拠地を訪問したことに始まる。彼らは9年前に、他の多くのオトミー移住者あるいはオアハカ州出身のトリキ(triquis)やメキシコ州出身のマサウア(mazahua)など貧しい農村共同体から出てきた先住民同様、目をつけた空地を占拠したのだった。筆者の主なインフォーマントは、この占拠地を含む四つの占

拠地に集住するオトミー移住者計92世帯、同郷者とは集住していない10世帯強、および、彼らに支援活動を行なっている組織である。

支援組織に関するれば、メキシコシティの先住民に支援活動を行なう組織の数は、政府、非政府を問わず、近年増加している。それらは、50年以上の歴史を有する連邦政府の先住民政策実施機関であるINI (Instituto Nacional Indigenista, 1989年に首都圏部局を開設)、上記の組織以外にも先住民移住者の「基本的必要」にかかわるサービスを提供する諸機関をその中に含む連邦区政府、教育水準の向上といった長期的事業の実施に強みを持つさまざまな市民組織、教会、はては政治的支持を得るために先住民移住者に便益供与を約束する政党(与党PRI〔制度革命党〕と左派野党PRD〔民主革命党〕)まで、多岐にわたる。先住民移住者の抱える問題の広さと深さを前にするならば、これら支援組織の活動の効果は自ずと限られる。しかし、次章でみるように、ある局面ではそれらは大きな影響力を持ちうる。さらに、学習効果と支援組織間の競争を通じて、活動の効率性は徐々に改善している。集住する先住民グループのリーダーの主な活動は、これら支援組織から最大限の利益を確保することにある。他のグループと比べ実績において見劣りしたり自分の親族を優遇するリーダーは、成員内に不満や対立を引き起こし、ときに解任の憂き目に遭う。

2. 出身農村サンティアゴ・メスキティラン

『1995年度人口調査』によれば、オトミー人口は28万3263人、先住民総人口の5.17%を占める。彼らの居住範囲はメキシコ中部の複数の州にまたがっており、ケタロ州アメアルコ市(Amealco, Estado de Querétaro)のサンティアゴ・メスキティラン(SM)はそのひとつである。海拔2000

メートルから2400メートルに位置し1日の気温差の激しいSMは、六つの地区(barrio)に分けられる。計9469名の人口のうち、オトミー語を話す者の比率は93.5%に達する。そのうち、86.5%が二言語人口である。78年に、ケタロ市、メキシコシティに接続する舗装道路が建設された。SM—メキシコシティ間を往復するバスは、1時間に1本通る。片道68ペソ*9、所要4時間である。

SMの主産業は、とうもろこし、フリホール豆、そら豆、豚、鶏、七面鳥などを栽培・飼育する農牧畜業である。今では農地の大部分に灌漑が施され、一部の地区では二毛作も行なわれている。しかし、山際には天水に頼る個所もみられる。とうもろこしなどの基礎穀物栽培では、農地の細分化と価格停滞のため、化学肥料や農業機械を導入するのは割に合わない。収穫物のほとんどは自家消費に回される。その他、庭で栽培される南瓜、竜舌蘭、サボテン、林檎、無花果、畑に自生する野草(quelite)、祭や結婚式などめでたい日に一部が食される家畜など、自家消費の源泉は豊富である。SMに市場はないため、大きな買い物には小型バスで近くの町にまで出かけねばならない。こうした不便はあるものの、「村(rancho)の方が食い物がうまい。(多くの家庭ではもはや実践していないが)手打ちのトルティージャ、100%天然のプルケ(pulque=竜舌蘭から簡単にできる伝統酒)なんて最高だ」というのがインフォーマントの口癖であり、自分達の土地で育った瑞々しい食材が、彼らのSMへの愛着ないしアイデンティティのひとつを構成しているのは確かである。

オトミーは、アステカ帝国時代にもスペインの植民地下でも、とりわけ迫害されてきた先住民として知られる。1970年代以降(特に94年のサパティスタの蜂起以降)、先住民の文化を肯定的に捉えようとする言説が強まってきたものの、オトミーであるこ

とが不利に働く社会状況は変わっていない。インフォーマント自身が半ば自虐的に方言(dialecto)と呼ぶオトミー語をメスチソを前にして話すのは、支援組織といるときや、「先住民性」を見せることが客の興味をそそる)華やかな民族衣装を身につけ路上で民芸品販売に従事しているときなど、彼らの利益を損なわない場合に限られる。

しばしば嘲笑の対象であったオトミー、その中でもSMのオトミーがいかなる歴史的経緯をたどってきたのか。本稿ではこの問題を詳述するゆとりはない。ここでは、「1920年代まで、SMのオトミーはメスチソの経営する大農場に隷属する存在だった。しかし、30年代に農地を分配された彼らは、メスチソ社会との接触の比較的少ないまま、安定した生活を享受できるようになった。ところが、47年に起きた『口蹄疫の発生』を理由に政府があらゆる家畜・役畜を殺生する事件、50年代以降人口増加に伴い進んでいく農地の細分化、教育、保健、電気・上下水道などのインフラ整備の遅れ、近代的農業技術導入の困難、農外雇用機会の不足のため、メキシコシティ、グアダハラ、モンテレイといった大都市*10へ移住する者が次第に増加していく」という事実を指摘するにとどめる*11。

最近では、レタスや花卉(pasuche)など換金作物の栽培が広まっており、さらに、バスで通える範囲内に建設された(低賃金労働力を目当てに進出した)工場での労働、教職や雑貨小売店の経営など、農外の雇用機会も徐々に増えつつある。インフラも整ってきており、教育に関しては、小学校が六つの地区それぞれに少なくともひとつはある他、1994年には中心広場の脇に高校も開設され、現在およそ70名の若者がそこで勉強している。教育水準は着実に改善している*12。SMに住むことの経済的魅力が増していくならば、移住者の数は今後減っていくであろう。しかしながら、インフォー

マント世帯主の中で、出身農村に1ヘクタール以上の農地を保有している者は皆無に近い。農地を何ら持っていない者が半数近くを占めるであろう。移住の背景には、慢性的な貧困があるのである。

3. メキシコシティのオトミー移住者

移住の背景には、SMにおける上記の経済状況がある。では、メキシコシティに移住することにより、生活の質は改善するのだろうか。オトミー移住者の生活の質は、SMよりも豊かとは必ずしもいえず、むしろ貧しくなっていると判断し得るケースもある。

世帯の貨幣所得からみてみよう。調査されることへの不信、所得の変動、インフォーマルな自営業者の場合所得(=売上マイナス費用)をしばしば把握していないこと、児童労働について親は話したがらないこと、といった理由のため、それを正確に知るのはきわめて難しい。支援組織は、集住する移住者グループの成員に対し、「支援活動のための基礎データを得たいから」と申し出て、通常簡単なセンサスを実施する。だが、その場合、先住民の側には窮状を過大に申告する誘引が働き得る。支援組織に対し、実際よりも明らかに低い所得を申告するインフォーマントを筆者は何人かみてきた。それでも、世帯の平均所得は月額2500ペソから3000ペソの間、最小額が1500ペソ、最大額6000ペソ前後と筆者は推定する。これは直接的には、世帯内の就業者数と彼ら各々の貨幣所得に依存する。後者については、次章で触れる(第1表)。もちろん、幼児や病人などの非就業者を多数抱える世帯では、成員1人当りの貨幣所得は小さなものとなる。メキシコシティの現今の法定最低賃金^{*13}が月額1000ペソ強であること、幅はあるものの世帯の平均成員数が5名強であること、農村とは異なり作物を自家消費できないこと、を考慮

するならば、インフォーマントの多くは都市貧困層ないし最貧層に含まれる。しかし、支援組織のベテラン職員が語るように、「一般にイメージされるのとは異なり、彼らみんなが(所得)貧困に苦しんでいるわけではない」。「むしろ問題は、彼らが将来より豊かな生活を享受する可能性の低さにある」のである^{*14}。

次に、彼らの知識へのアクセスをみてみよう。これは、その経済的収益の観点からは人的資本とみなされる。オトミー移住者の教育年限は、出身農村がSMと似たような経済状況下にある他の先住民移住者同様、際立って低い。30歳以上のインフォーマントの中で中学校を卒業している者は10名もいない。深刻なのは、メキシコシティの学校に通う若者の中でみられる基礎教育課程での落第率と放棄率の高さである。とりわけ、集住するインフォーマントの場合その高さは顕著であり、結果として、教育プログラムに取り組む非政府組織の第1目標が就学児童に小学校を卒業させることになるという事態が生じている。教育問題を統計データを通じてしか扱ったことのない研究者には、この状況はミステリーであろう。本稿では、この重要な論点には立ち入らない。ただ、それは、早くから建設労働などの単純労働市場に参入する選択と比べて小中学校を終えることの期待収益が必ずしも高くないという構造的な要因^{*15}に、両親の教育水準の低さ^{*16}、路上での児童労働・シンナーの吸引、(最貧世帯の場合効いてくる)制服や学用品の負担、といった彼らの側の要因の結びついた結果であるとだけ記しておく。集住していないインフォーマントの中には、アルコール依存症の父親と死別したにもかかわらず苦学して国立大学に通う若者が1名いる他、高校生も何名かいる。また、非政府支援組織の地道な活動もあり、不法占拠地に集住する親と子供の間でも、教育への関心は高

第1表 SM出身オトミー移住者の主要な雇用先（経済活動）

雇用先	従事者	特徴	所得
民芸品製作と販売 (fabricación y venta de las artesanías)	<ul style="list-style-type: none"> 主に成人女性 成人男性 児童 	<ul style="list-style-type: none"> 参入条件としての技能習得は比較的容易(1カ月) 労働時間とリズムの弾力性 製品販売市場における競争の激化, 所得確保のためのさまざまな試み 政府の影響力の大きさ(「セントロ・オトミー」, 路上での販売の認否) 「先住民性」を意識的に利用 	<ul style="list-style-type: none"> 所得の不安定性: 1日0~300ペソ(どこであるいは誰に売なのか, どれだけの量を売りにだすのか, 季節や天候といった要因に依存)
建設労働(Albañil)	<ul style="list-style-type: none"> 成人男性 定期的に就業する者とそうでない者(アルコール依存症は後者)。 	<ul style="list-style-type: none"> 参入条件として学歴不要 肉体的疲労 上限はあるものの, 経験に応じて賃金上昇 情報(どこにいく条件の仕事があるのか)を入手することの重要性 	<ul style="list-style-type: none"> 見習(ayudante)は週400~500ペソ 熟練労働者(maestro)は週800~1000ペソ 仕事のない週もあり
露天商(Comercio en la vía pública)	<ul style="list-style-type: none"> 成人男性・女性 児童 	<ul style="list-style-type: none"> 活動規模の大小 露店(puesto)を構えない露天商の場合, 労働時間とリズムは弾力的。彼らは安く購入した商品を路上や駅, 交差点で販売 児童や成人女性の場合, 家計の副次的収入確保のために従事すること多し。しばしば, 物乞いに近いことあり。 	<ul style="list-style-type: none"> 1日20~150ペソ(一般に, 女性・児童<露店を構えない男性<菓子や飲料を売る露店を構える男性)
車の窓拭き(Limpia - parabrasas)	<ul style="list-style-type: none"> 若い成人男性 児童 	<ul style="list-style-type: none"> 技能習得は容易 労働時間とリズムの弾力性 「半物乞い性」(運転手の殆どが望まないのに, 窓を拭いてチップを受け取る) 	<ul style="list-style-type: none"> 1時間10~20ペソ
物乞い(Mendicidad)	<ul style="list-style-type: none"> 成人女性と児童(所属世帯が貧しいほど, より定期的になる傾向) 	<ul style="list-style-type: none"> 労働時間とリズムの弾力性 最低限の生活水準を保証する手段 「先住民性」の顕示 他の先住民移住者と比べ従事者の比率高し 	<ul style="list-style-type: none"> 1日20~150ペソ(場所, 時間帯, 子連れか否かといった要因に依存)

まりつつある。しかし、オトミー移住者の知識へのアクセスは全般に限られており、それは労働市場において彼らに不利に作用している。

オトミー移住者の生活の質に関してこの他に言及せざるを得ないのは、成人の間でのアルコール飲料の過度の摂取と児童の間でのシンナー吸引である。前者に関すれば、成人男女住民の半数以上がアルコール依存症の兆候を示す不法占拠地もある。アルコールもシンナーも、健康を損ない寿命を縮め得る。さらに、直接に（投資に回す予算を削るという意味において）間接に彼らの人的資本の蓄積を妨げる。

最後に、オトミー移住者の生活の文化的側面に触れてみたい。先住民は、メキシコシティのような都市部に移住し共同体から空間的に離ればメスチゾ化する、と考えるのは短絡である。文化の構成要素の中でおそらく最も重要であろう言語に関すれば、年齢、性差^{*17}、メキシコシティでの居住期間、集住しているか否か、といった変数に応じて差がみられるものの、オトミー語の使用は広く観察される。だが、それは非オトミーとの会話においてだけでなくオトミー間でもスペイン語が頻繁に話されている事実と矛盾しない。また、移住者の話すオトミー語は、スペイン語の単語が多数混じりかつ文法の簡略化された「都市のオトミー語」となる傾向にある。

文化本質主義論者だけでなく今日では政府も、文化的多元主義 (pluralismo cultural) を唱える。集住したり(祭や祝事への参加, 収穫の手伝いのため) SM と行き来することにより、オトミーの文化やアイデンティティを部分的にせよ保持する多くの移住者の姿は、都市における文化の多元性の例であり、望ましいもの・美しいものとして推進されるべきだろうか。先住民への差別および少なくとも

1960年代まで政府が公に文化統合政策を掲げてきたことに対する反省を促す点において、こうした言説の価値は否定できない。しかし、それが安易に取られることの危険性を二つほど指摘しておきたい。第1に、オトミー移住者は、たとえ過去のように否定的な意味合いが込められていないとはいえ、外部者により先住民あるいはオトミーとして存在を限定されることを好まない。政府に対する先住民移住者の要求においては、「住むにふさわしい家」(vivienda digna)、路上での販売スペースの確保あるいは子供達への奨学金の支給、といった経済的要求が優位を占める。

第2に、「先住民性」が都市において再生産される文脈を考慮せねばならない。それは、先住民の一部インテリ層や外国人も関与する先住民文化の再評価運動にとどまらない。筆者は、インフォーマル部門での就業や狭く雨漏りに悩まされる住宅での居住を余儀なくするような、移住者の直面する経済的制約条件を強調したい。このような厳しい制約条件下に置かれたとき、先住民移住者にとっては、同じ母語を操り安酒をとことんまで飲み交わす仲間とのつながりが貴重なものとなる。問題は、ときに葛藤を伴うこの選択が、彼らの開発からの剝奪状況を維持ないし強化するよう働き得ることである。それは一方で、金の貸借や仕事の情報交換などを通じて不確実性に満ちた彼らの生活を安定化させる、あるいは、グループの成員として支援組織から経済的援助を獲得する、というポジティブな経済的機能を持つ。だが同時に、(メキシコシティではSMよりも高い水準が要求されるにもかかわらず)人的資本を着実に蓄えていくことへの関心の低さ、さまざまな危険に満ち溢れた路上に子供を働きに出すこと、果てしなき酒宴など、彼らの生活の質の向上をより一層困難にする側面も併せ持つ。先住民移住者に対する差別は、こう

した条件下では、彼ら自身による「先住民性」の否定(=メスチソ化)ではなく、むしろ彼らの社会的孤立を促すよう作用する*18。

以上、オトミーの生活の質をみてみた。SMにおける窮乏から逃れるため移住したものの、メキシコシティにおける彼らの生活は苦渋に満ちている。次章では、民芸品生産を例に、オトミー移住者の経済を今少し掘り下げてみたい。

- * 6 INEGI, *Conteo de Población y Vivienda 1995*, México, 1996.
- * 7 彼らの中には、乱開発に対する抵抗運動や文化保存運動に取り組む者もいるものの、貧困に喘ぐ農村から移住してきた先住民よりも一般に経済的には恵まれた状況にある。
- * 8 Robert Kemper, *Campesinos en la ciudad: Gente de Tzintzuntzan*, México, Secretaría de Educación Pública, 1976; Lourdes Arizpe, *Migración, etnicismo y cambio económico: Un estudio sobre migrantes campesinos a la ciudad de México*, México, El Colegio de México, 1978の2冊を比較してほしい。学術論文ではないものの、メキシコシティに住む先住民の最近の動向を掴むには、Ce-Acatl, *Indígenas en la Ciudad de México*, México, núm 101, 1999が便利である。
- * 9 本稿執筆時の為替レートでは、1ペソは10円強である。
- * 10 彼らの移住先は、国内だけでなく米国にも及ぶ。不法出稼労働者(mojado, bracero)として越境することへの関心は、若い成人男性の間では高い。「工場労働者やウェイターあるいは農業労働者として長時間働けば、自家用車に乗って帰れるんだ」。実際に見たあるいは人づてに聞いた同郷者の成功談に若者は憧れる一方、「手配師(coyote)に8000ペソ払わないといけない」、「不法入国は危険だし捕まる可能性もある」、「怠け者(burro)は向こうへ行ってもダメらしい」など、その限界も知っている。
- * 11 Lourdes Arizpe, *Indígenas en la Ciudad de*

México: el caso de las "Martías", México, Secretaría de Educación Pública, 1979, pp. 79-96.

- * 12 アメアルコ市の教育省の調査によれば、1998年度(98年8月~99年7月)におけるSMの小学生の落第率は3.7%である。この値は、メキシコシティの小学校に通うインフォーマントの落第率よりも低い。
- * 13 法定最低賃金は(物価上昇率で割り引いた)実質額でみると、1982年の債務危機以降趨勢として低下しており、都市部では最低賃金しか得ていない労働者は皆無とされている。
- * 14 この他、受益児童の数は限られるものの、連邦区政府や一部非政府支援組織から奨学金(月額600ペソ前後)を支給されている世帯もある。非貨幣所得としては、電話帳をトイレット・ペーパーの代わりに、廃材を家の柱や壁に、といった廃物の再利用、および、教会を含む支援組織や近所住民による、不法占拠地に集住するインフォーマントへの食事や中古の学用品・衣服、おもちゃ、折畳み式ベッドなどの贈与、を挙げることができる。後者は、むしろ散発的であり家計に占めるウエイトはわずかなものの、先住民移住者に依存心を生じさせ得るという点で重要である。
- * 15 近年のメキシコでは、教育投資の期待収益率は初等教育よりも高等教育の方が高く、しかもその格差は広がる傾向にあるとされる(Carlos Muñoz Izquierdo, "Efectos de la escolaridad en la fuerza de trabajo," Pablo Latapí, ed., *Un siglo de educación en México*, Tomo I, México: Fondo de Cultura Económica, 1998, pp. 175-199; World Bank Mexico Department, Mexico: Enhancing Factor Productivity Growth, Report No. 17392-ME, 1998, Chapter VI. 大部分のオトミー移住者にとって、大学まで行くことは夢物語である。
- * 16 両親の教育水準が高いほど、その子供の教育水準も高まる傾向にある。
- * 17 社会参加の度合の一般に低い女性の方が、オトミー語をより多くの場面で話す。
- * 18 経済的制約条件が先住民移住者の剝奪状況を

説明する最大の要因であるとしつつも、それと彼らの対応との間の相互作用も視野に入れた先行研究として、*8と*11に掲げたアリスベ(Arizpe)の文献を参照してほしい。オトミー移住者の中で、教育年限の高いものおよびプロテスタントへの改宗者は、同郷者の間でみられる教育への関心の低さや飲酒癖に批判的で距離を保つ傾向にある。また、先住民移住者と現場で接している支援組織の職員の多くも、たびたび見受けられる一方的に受け取ることを当然とする姿勢も含め、先住民の側による「剝奪状況への適応」が、問題の一角をなしていることを認識している。

2 オトミー移住者の民芸品製作と販売

オトミー移住者の従事する主要な経済活動をまとめた第1表をみてほしい。民芸品製作と販売、(自営業ではないためインフォーマル部門からは除かれる)建設労働、露天商、交差点で信号を待つ車の窓拭き、物乞いのどれをとってみても、人的資本を要求しない参入の容易な活動である。また、活動規模や経験に応じて内部差がみられるものの、五つの活動の間に所得における大差のないこと、それぞれにおいて所得の伸びに限界のあること、がみて取れよう。家計の状況次第では、幼児や病人を除く世帯成員のすべてが就業人口となる。就学児童も、民芸品製作の手伝い、交差点でのガム売りや窓拭き、あるいは物乞いに従事することにより、家計に貢献し得る。以下では、その始まりと製作、販売とに分けて、彼らの民芸品生産を論じてみる。

SM出身のオトミー移住者は、他の多くの先住民移住者同様、彼ら独自の民芸品の製作と販売に従事している*19。最も多く作られているのが、大中小三つのサイズのある、先住民女性を真似たりボン付の布製人形である。その他にも、花束を抱い

たジュート製の人形や刺繍入りのテーブルクロスなども彼らの手による民芸品である。彼らの民芸品生産を経済活動としてみたとき、それは、「政府の影響を受けた、先住民移住者のインフォーマル部門」と捉えることができる。

1. 始まり

先住民の民芸品は常に、観光客の期待するように、固有の文化的特性の刻み込まれた長い歴史を誇るものではない。政府、非政府を問わず、技術・資金援助や販路の確保など、先住民の民芸品生産を支援する組織は現在では無数にあるとあってよい。オトミー移住者に関するれば、民芸品生産は、彼らの窮乏に対する政府の政策の産物であった。

1971年に当時の連邦区政府は、休日は散歩客や観光客でごった返すコヨアカン広場の脇に、「オトミー・センター」(Centro Otomi)を開設した。目的は、路上でガム売りや物乞いにいそむ、SM出身オトミー女性の増大という問題に対処することにあった*20。

同「センター」では、無料で食事や医療サービスが提供された他、彼女らに民芸品の製作を教え、その製品を買い取ることも行なわれた。人形のデザインは、先生と参加女性とが共同で考案したものである。「センター」は1980年代半ばに閉鎖されるものの、民芸品製作は絶えることはなかった。それは、友人の間であるいは親から子へと伝達され、現在では「SMの民芸品」であり、移住者の主要な所得源泉のひとつを占めるに至っている。

このように連邦区政府の援助を発端とする、オトミー移住者の民芸品製作と販売は、彼らの置かれた制約条件とうまく適合したインフォーマル部門とみなすことができる。ここでいうインフォーマル部門とは、「フォーマル部門に参入し得ずかつ貯蓄もない人々が、世帯の生存確保のために乏し

い資源を用いて自ら創出した、参入の容易さと成長可能性の低さにより特徴付けられる経済活動」のことである*21。

2. 民芸品の製作

民芸品の素材は、連邦区の旧中心街 (Centro Historico)にある専門店で購入する。先住民女性の布製人形の場合、素材は色や柄の異なる布、レース、糸、綿、リボンなど、10から11種に及ぶ。この中では、人形にアクセントをつけるリボンの単価が最も高い。素材の単価は大量に購入すればするほど、安くなる。ゆえに、民芸品の製作と販売に特化している世帯では、素材の購入資金を手元に貯めておくことが重要になる。手作業で全ての工程をなし得るものの、布の縫い付けには中古で500ペソ、新製品で1000ペソから1500ペソするミシンが用いられている。

民芸品製作への参入は容易である。学歴が一切必要とされないだけでなく、1月もあれば人形製作の全工程を習得できるという。オトミー移住者の作る民芸品は、製作技能の習得に長い年月のかかる、高品質の民芸品 (artesanía de calidad) ではない。「日本に輸出できないか」と尋ねるインフォーマントは多いが、その価格と質を勘案すると難しいというのが筆者の実感である。それでも、服の布地やリボンの種類を変えたり、子連れの人形や藁帽子をかぶった農民男性の人形を作ってみたり、と差異化をはかる努力もみられる。

きわめて労働集約的な製品であるため、労働コストをいかに抑えるかが鍵となる。男性よりも女性の就業者比が高いのは、女性の方が教育年限の低いこと、「家事は女性の仕事」という性別役割分担が社会的にはっきりしていることを所与とするとき、労働時間とリズムに弾力性を持たせ得る民芸品の製作(と販売)に従事することの機会費用が

低いからである。建設労働や露天商を本業とする成人男性も、夜や休日にはしばしば民芸品製作を手伝う。児童も単純工程において両親を手伝う。SMに残る家族がメキシコシティを訪問したときに素材を受け取り、SMで人形を完成させて再訪問時にそれを持ってくる、というケースもみられる。

3. 民芸品の販売

オトミー移住者の民芸品製作が参入の容易さと労働コストを抑える努力により特徴づけられるならば、その販売面における特徴は、限られた市場でいかに多くの所得を得るかの激しい競争となる。彼らの販売先は、観光客のよく通る路上や広場 (plaza) での直接販売と卸売商 (mayorista) への販売とに分けられる。

オトミー移住者による直接販売からみてみよう。路上で売る場合、オトミー女性はビニールやショールの上に人形を前からサイズの小さい順に並べる。人形の数が多いほど見栄えがよく、通行客を惹きつける。場所により価格の相場は決まっているものの、金回りの良さそうな外国人観光客には高値をふっかける。売れる時間帯は夕刻から夜にかけてであり、曜日としては金曜と土曜がよい。広場での販売は、民芸品価格の相場が全般に高いという利点を持つ反面、連邦区政府に場所の使用料を払わねばならない。「先住民性」を客に示すため、彼女らはふつう民族衣装に身を包む。路上に座りながら彼女らが人形作りに励んでいるのは、時間節約のためだけでなく、それが「先住民女性による手作りの品」であることを証明する意味もある。

彼女たちの所得はどれくらいだろうか。多くのインフォーマントは人形1個当りの純益は半分くらいと語る。筆者がミシンの償却費も含めた生産費用を計算した結果、路上での販売価格の平均よ

り若干安い、小サイズの人形10ペソ、中サイズ20ペソ、大サイズ35ペソという価格で売れば、確かに1個当たり約半分の純益を得ることが分かった。もしもこの価格で中サイズの人形を1日に5個売れば、50ペソの純益を上げたことになる。売上は不安定であり、天候に恵まれず1個も売れない日もあれば、優に100ペソを超える純益を得る日もある。

参入者の増大により、「SMの民芸品」市場は半ば飽和状態にあるとあってよい。そのためインフォーマントは、旧中心街の民芸品市場や商人から購入した別の民芸品を人形と一緒に販売したり、新しい販売地を探したり、と所得を確保するために様々な戦略を取っている。市場の模索に関しては、まだ同郷者により開拓されていない観光地^{*22}の来客シーズンに200個から300個の人形を抱えてバスで赴き、メキシコシティの2倍以上の価格で短期間にできるだけそれらを売り捌こうと試みる世帯もある。

市場の大きさを制約するのは、競争の過熱化だけではない。1997年の選挙で勝利したPRD連邦区政府は、旧中心街からの露天商撤去を政策として打ち出した。通行人の多い旧中心街は露天商の密集区域であり、うまみのある市場を失うことになる露天商はこの政策に抵抗している。中央広場(Zócalo)などの旧中心街でこれまで人形を売っていたオトミー女性と、巡回に来て露天商を見つけたらその商品を取り上げる機動隊員(granadero)の間には、いたちごっこが続いている。機動隊員が近づいたら、彼女らは人形をショールや紙袋の中に隠す。機動隊員が去るまでは、近くの露天商仲間と立ち話である。露天商一般にいえることだが、政府が路上で販売を許可するか否かは死活的問題である。「オトミー・センター」はオトミー移住者を利したものの、旧中心街からの露天商撤去

政策は一部移住者に明らかに不利に働いている。

最後に、小数派ではあるが、卸売商に民芸品を売っている移住者のケースをみてみよう。卸売商は1世帯から一度に数百の人形を購入、それをメキシコ各地の民芸品ショップに売る。人形を作る側にとっては、その購入量の多さは魅力的なものの、小サイズの人形が7ペソから8ペソであるなど、買取価格は低い。さらに、卸売商からの注文は必ずしも安定していない。観光のオフ・シーズンなどには注文のない月もある。路上だけでなく民芸品ショップにおいても、「SMの民芸品」への需要は限界に近づいているのである。

このように、オトミー移住者の民芸品製作と販売は、「政府の影響を受けた、先住民移住者のインフォーマル部門」と把握し得る。その出発点は、ガム売りや物乞いに代わる生活の手段を与えようとする政府の政策にあった。やがて、民芸品生産はオトミー移住者の主要な経済活動のひとつとなる。今では彼らは「SMの民芸品」に誇りを持ち、また、逆境をはね返そうと多様な努力をしている。だが、それは都市の先住民である彼らの生存を支えこそすれ、それにより彼らが上昇することはないだろう。

*19 メキシコの民芸品については、Marta Turok, *Cómo acercarse a la artesanía*, México: Plaza y Valdes, 1988.

*20 民族衣装を着た彼女らは、侮蔑的に「マリーア」(María)と呼ばれた。「マリーア」の中には、メキシコ州出身のマサウア(mazahua)も多かった。そのため、同年に連邦区政府は巨大市場のあるメルセー地区に「マサウア・センター」(Centro Mazahua)を開設、そこでも参加女性は民芸品の製作技術を習得した。

*21 インフォーマル部門のこうした把握は、構造学派経済学の流れを汲む「ラテンアメリカ・カリブ地域雇用プログラム」(PREALC)の立場に最も近い。ラテンアメリカのインフォーマル部

門をめぐる論争を整理した書物として、Cathy Rakowski, ed., *Contrapunto: The Informal Sector Debate in Latin America*, State Univ. of New York Press, 1994; Jim Thomas, *Surviving in the City: The Urban Informal Sector in Latin America*, London, Pluto Press, 1995 の2冊を挙げておく。

- *22 グアダハラやモンテレイといった他の大都市だけでなく、アカブルコやプエルト・バジャルタなどの観光地でも、インフォーマントいわく、「SMの民芸品」を売っている親戚や知人がいるという。

3 結 語

冒頭で断ったように、筆者による、サンティアゴ・メスキティラン出身オトミー移住者の実態

調査は進行中であり、本稿は、経済的側面を中心とした彼らの生活のスケッチというべきものである。教育問題、支援政策の評価、オトミーの歴史や文化・その都市での再生産、といったテーマは触れる程度にとどめたが、それらについては別の機会ですっきりと論じたい。メキシコシティに住む先住民移住者という、先住民の中でも取り上げられることの少ない人々が日々直面する困難を通じて、ともすれば単純化されがちな先住民問題の複雑さを示すことができたなら、本稿の目的は達したことになる。

〔付記〕 「公益信託山田学術研究奨励基金」とメキシコ外務省の助成に謝意を表す。

(うけだ・ひろゆき/東京大学大学院経済学研究科博士課程)